

川村先生の御退官を惜んで

武隈良一

川村先生といえば、わたしはいつもデカルトのことばを思い出します。それというのは、デカルトが自著「哲学原理」をエリザベト王女に献上するとき、次のように言って居ります。

「ほとんどすべての人に見られることなのですが、形而上学にたずさわる人は数学に恐れを抱き、逆に数学に熱心な人は形而上学について理解がないのであります。この両方に等しく精通しているのは、ただ殿下の知性だけであり、このゆえに殿下はまことに比類なき方と申し上げるのであります。」

この点、川村先生は東京高等師範学校では数学、つづいて文理大では哲学を修められ、務台理作教授(1890-1974)の高弟としてその俊英を認められた方です。昭和19年10月小樽経済専門学校教授として赴任されましたが、わたしが御交誼を頂くようになったのは終戦後で、20年の秋頃からであったと思います。

人間若い時代には文学または哲学に憧れるものですが、わたしも後者に引きずられました。その折良き先達として、心に残る良き助言、感銘深い数々の話をして下さったこと今に忘れられません。一般教養学科の数学の教官であったことの幸せが身に沁みました。

先生の専門はカント哲学であり、「純粹理性批判」にはじまる3つの批判書はいわば座右の書であったと思われませんが、時折わたしにカントの思索の強靱さを語って下さいました。すべての哲学がカントに流れ込み、そしてすべての哲学がカントからはじまると言われている、カントに私淑している先生が羨しく思えました。

「人文研究」に次つぎと発表された先生の論文を垣間見ている間に、先生の研究題目は「カントの宗教哲学」であることが分かりました。しかし小樽を

離れてからは先生の論文に接する機会がなく、残念に思っておりましたが、一昨年(1974年6月)小樽商大人文学研究会発行の先生の著書が送られてきたとき、喜びと懐かしさで一杯でした。これは先生のご苦心の結晶であり、わたしにとっては有難い啓蒙の書であります。つい先日九月に入ってから軽井沢へ学生のゼミ指導に行きましたが、昼はセミナーハウスで確率論の講義をし、夜は宿で先生の「カントの宗教哲学」を読んでいた。

カントの著書「単なる理性の限界内における宗教」(Die Religion innerhalb der Grenzen der blossen Vernunft)はわたしにとっても若い時代の思い出の書であります。その意味で先生の著書の第6章(悪について)、第8章(宗教的理想の実現)は感銘を新たにするものがありました。

人間の性癖 Hang は3つの段階をもつ。第1は人間本性の脆弱性 Gebrechtheit, 第2は動機の不純性 Unlauterkeit, 第3は人間心情の悪性 Bösartheit である。このうちの第3こそは、反道徳的格率の積極的な行使であり、カントによって根本悪とよばれるものである。

Sie kann auch die *Verkehrtheit* (perversitas) des menschlichen Herzens heissen, weil sie die sittliche Ordnung in Ansehung der Triebfedern einer freien Willkür umkehrt und,

「それはまた人間心情の顛倒とも称される。何となれば、自由意志の動機に関して道徳的格率を顛倒するからである。(川村訳)」

カントは結局、悪の概念の先験的演釈には成功しなかった。といって人間を単なる自然性とも悪魔的存在ともきめつけることが出来ず、次のように言っている。

Der Mensch (selbst der ärgste) tut, in welchen Maximen es auch sei, auf das moralische Gesetz nicht gleichsam rebellischerweise (mit Aufkündigung des Gehorsams) Verzicht.

「人間は(最悪なる者といえども)いかなる格率を採るにもせよ、道徳律をいわば叛逆的に(服従の拒否を宣言して)棄却はしない。(川村訳)」と。

これ以上の引用は身の程知らずとなりますので差し控えますが、カントの根本悪だけはいつの時代にも人間にとって大きな問題であることを思い、今後も関心を持ちつづけるつもりで居ります。

小樽に居るときは、何時でも先生に気軽に教えて頂けると思い、気安く過しておりましたのに、今となつては、その叶わぬこと甚だ残念でなりません。

最後に、先生の今後の御幸福を祈って拙ない筆をおきます。

(1976年9月21日)